

# 会報

第18号

編集・発行人 支部長 大橋 毅彦

ドボンとチャボン、あるいはブクブク…

大橋 毅彦

「明鏡止水」という言葉には何の罪も科もないが、澄んだ池もそのままにしておくと、次第に澱んでいつてしまう。それを防ぎ、中にいる魚たちに新鮮な酸素を供給するためには攪拌が必要だ。関西支部にとって、そのために投げ込まれた大きな石にあたるのが、この秋に支部大会を全国大会と合同のかたちで開催する動きである。理事会からの依頼があつて以降、さまざまな議を経てきた私たちは、現在の支部は「全国大会の運営を実質的に支える〈体力〉がある」と判断、こうした外からの負荷を支部としての活力に変えていくことを目指しつつある。

ただ、ドボン!という水音は一気に水面を波立たせるが、その波紋は急速に収まっていきがちだ。むしろ、少しは小さくても幾つもの石を投げ続けた

方がそれぞれの波紋が重なり合い、よりダイナミックな動きが生じていく。それすなわち、この春の支部大会からスタートさせた連続企画「文学研究における〈作家／作者〉とは何か」である。全国大会の中で行われる支部の特別企画「拡張する〈作家／作者〉イメージと実証性のありか」はその第二弾にあたる。じつは、支部のチャボン、チャボンの方がドボンより先行しているのである。

そしてさらに、水底では——時間をかけて支部の活動を内側から盛り上げていく水泡が、何箇所からも連続的に上り出していることも肝要だ。そんな動きに対して敏感に反応していかれるセンスを持った集団を目指すことも、いま私たちには問われていると思う。

## 関西支部特別企画案内

二〇一三年度 秋季大会（全国大会合同開催）於・関西大学

一〇月二七日（日）「大会二日目」 午後二時より

### 「プログラム」

「拡張する〈作家／作者〉イメージと

実証性のありか」

### 連続企画

「文学研究における

〈作家／作者〉とは何か」（第二回）

「拡張する〈作家／作者〉イメージと

実証性のありか」

趣旨説明

司会 長沼 光彦  
山崎 正純

「こころ」論争における

〈作者〉の問題

内藤 由直

テキスト論者が個人学会に

こだわる理由 田口 律男

書き手と作家の境界

―若き女性の教養誌『新女苑』

をめぐって―

小平 麻衣子

作者と訳者の境界で

野崎 敏

質疑応答

閉会の辞（代表理事）の後、臨時総会

なお強力に存在するが、そのような磁場にとらわれない、新たな作家研究・実証研究の地平を探るべきではないだろうか。

例えば、従来なら作家研究の枠内で捉えられるような肉筆原稿や草稿を用いた研究が、テキスト生成論の観点から行われている。さらに、作家を社会的交流の場と捉え、そのサークルをテキストの基盤と見なす研究もある。サブカルチャーの世界では、〈作家／作者〉の概念枠を軽やかに乗り越えた例も認められる。起源としての作家の存在を感じさせる文学館や文学碑は現在も大きな意味を持つが、作家ゆかりの地の積極的な活用は、文学受容の場を活性化させる役割を果たすものと言えるよう。こうした視点で近代文学史を再点検してみれば、従来の〈作家／作者〉像が修正を迫られる場合もあるはずだ。

目指すべきは、作家の存在を作品解釈において最終的に到達する目標とするのではなく、作家という指標の向こうに何があるかを明らかにすることだ。これまでの研究成果をふまえながら、本特集では、新たに視野を広げた中で見えてくる〈作家／作者〉のイメージと、作家を中心とする実証研究の価値の再検討をはかり、その方法論を現在の近代文学研究の中に位置づけることを企図する。

なお、関西支部では、二〇一三年度春季大会より連続企画「文学研究における〈作家／作者〉とは何か」（全四回）に取り組んでおり、関西支部春季大会でシンポジウムを行ったところである。本特集はその第二回目にあたるが、これ自体で独立した企画としても成立するものであることをおことわりしておきたい。

### 〔発表要旨〕

「こころ」論争における

〈作者〉の問題

内藤 由直

本発表は、一九八〇年代の「こころ」論争を読み直し、日本近代文学研究における〈作者〉とは何であったのかを再検討した上で、作家研究・実証研究の方途を探るものである。

「こころ」論争は、作品論的解釈とテキスト論的解釈が衝突した論争である。ここでは、テキスト論の実践によって、漱石の言葉として自明視されていた「こころ」の言語が読者の解釈に委ねられる言葉として捉えられ、作者の意図に還元されない多様な読みの可能性が

切り開かれた。作品の意味を保証していた〈作者〉の特権性が穿たれ、読者による読みの自由が前景化されたのである。

では、本論争で批判の対象となった〈作者〉とは、作品の意味を統御し、読者の読みを阻害するだけの存在であったのだろうか。

論争の端緒において小森陽一が「国家の反動的なイデオロギー装置と化した『こころ』という〈作品〉を打つ」「こころ」を生成する「心臓(ハート)」『成城国文学』一九八五年三月」と明言しているように、批判対象である〈作者〉の向こう側には、資本の再生産の諸条件を保証する国家のイデオロギーが見据えられていたはずだ。

しかし、「こころ」論争のその後の展開において、〈作者／作品〉を通して体现される国家イデオロギーの問題は十

分に検討されてこなかった。このことは、テクスト論の理念に備わっていた「資本主義イデオロギーの要約でもあり帰結でもある実証主義」(ロラン・バルト「作者の死」『物語の構造分析』みすず書房 一九七九年)に對する批判という目的意識が、論争の過程で見失われてしまったことを意味するのではないか。

発表では、論争の経過を辿りながら、読者の解釈を巡る議論の中で、上記の批評意識が忘却されていったことを指摘する。そして、「こころ」の読みに賭けられたイデオロギー批判を再度、議論の俎上に載せることで、今なお近代文学研究の場で機能する(作者)イメーجزの転換を図る。

テクスト論者が個人学会に

こだわる理由

田口 律男

人がどう見るかは知らないが、私はテクスト論者を以て任じている。その一方で、横光利一文学会にも深入りしている。矛盾だろうか。テクスト派なるものがあるとして、各人の好みはいろいろだろうが、私は「言葉の自立」を志向する(狭義の)モダニズムに惹かれる傾向にある。言葉の手ざわりや物質性に興味があるからだろう。それを探っていたら、横光利一に到達したとはいわない。が、テクストと作者とをつなぐ隘路を否定したくはない。

ただこの場合の作者は、実体ではなく言説によって構成されたものとなるだろう。(言説のなかには年譜なども含

まれる。むろん文学理解に年譜を参照する習慣は、歴史的なものである。)より正確に言えば、言説の束によって構成され、一般に流通した結果、もはや実体と見分けがつかなくなったものが「作者」ではないだろうか。(「日本」近代「文学」といった概念とほぼ同様だろう。)しかし、どんなに堅固な作家像も、それが構成されたものである以上、その言説の配置の仕方によってパラダイム転換が生じるのは周知のことである。とはいえ私たちは、つねにすでに作者の固有名が刻印されたテクストに包囲されている。それは原稿、ヴァリアント、断簡零墨、その暫定的集大成としての全集にまで及ぶ。文学研究もこの制度を下支えしてきた。この制度を支持するか否かは、だれも声高には語らないが、じつは当事者の政治的な立場とどこかでリンクしているはずで

ある。

では実証研究は、こうした状況にどのようなにかかわるだろうか。ここからは具体的な事例にそくして議論するに如くはない。当日問題にしたい一節を挙げておく。「間断もなく白日を呪ふ地獄の様に渦巻を漲らした煤煙の中に立体、そして又立体。」〔第五学年修学旅行記〕一九一六・三——横光利一にまったく興味がない人たちのためにも、なるべく広範な話題につなげたい。

### 書き手と作家の境界

——若き女性の教養誌『新女苑』  
をめぐって——

小平 麻衣子

作家とは、誰によって認定されるの

であろうか。例えば川端康成は、昭和一二年創刊の『新女苑』において、女性たちの文章を指導していた。投稿者たちの熱心さにもかかわらず、彼の指導は一貫して、作家になろうと思うな、というものであった。これは投稿欄という欄の性質とばかりは言えない。『新女苑』は、〈若き女性の教養〉を目指していたからである。

背景には、マルクス主義に代り、昭和一〇年代に復活した教養主義がある。復活というのは、むしろ大正教養主義が念頭に置かれるからであるが、ドイツ語でいう Bildung の意味を「教養」という語で表すことが一般化したのは、昭和期であることは注意されてよい。大正期には、「教養」は、知識や社会階層が下の者への教化の意味で主に使われていたのである。昭和期の教養の問題は、大衆が射程に入っていたゆえに、

「教養」の語との習合が自然であったといえるが、とすれば「教養」もまた、おなじみの二重基準を含みつつ、それを隠蔽していたことになる。文学の領域でも、作家の教養が説かれる時期において、女性たちに差し向けられた〈教養としての文学〉は、文学への門戸を開くよういながら、その職業化だけは阻止するものであった。これらは、この時期の教養が〈単なる知識ではない〉とされるゆえに労働にすりかわる事態や、政治や科学の重視による文学の周縁化なども複雑に絡み合い、文学における大衆と女性の階級的同視と、その実の齟齬を浮かび上がらせる。川端の指導も、これらと無縁であるわけではない。

本発表では、『新女苑』の投稿を扱い、女性の書き手を作家にさせない構造の分析を行う。既定の作家の追認にとど

めないという意味で、作家イメージの再検討を側面から試みたいと考えている。

## 作者と訳者の境界で

野崎 敏

一九六八年に発表されたロラン・バルトの「作者の死」は、翌年発表されたミシェル・フーコーの「作者とは何か」とともに甚大な影響を及ぼした。その行きすぎを是正する動きはあるにせよ、そこに含まれる批評的観点はなお変わらぬ重要さをもつ。その一つが、作者の意図をどう考えるかという問題である。作者の意図を最終的に到達すべき真実として作品を「説明」しようとする旧来の発想に対し、作品自体の

うちに作者の意図を超えて広がる意味作用の働きを探る「解釈」の可能性をバルト以降の批評は強調した。そのとき、作者にテクストが取って代わるのである。

そうした議論の枠内に、バルトらにとっては関心外だった「翻訳」の問題を投じてみるとどうなるか。翻訳者とはできるかぎり綿密に作品の意味を探りながら、別の言語でそれを再構築しようとする者である。そこで彼が常に意識するのはまさしく作者の意図である。翻訳者とは作者との自己同一視に支えられた存在だとすらいえるかもしれない。ということは翻訳は、バルト・フーコー以前の旧態依然たる作者観に支えられた、作者温存の営みなのだろうか。

だが、訳者による作者の裏切りもまた、翻訳の本質にひそむ重要な要素で

ある。翻訳こそは作者の死であるといったら誇張がさすがに過ぎるだろう。だが、作者の意図とは異なる変容を振りつつ「後熟」(ベンヤミン)していく作品の運命を、翻訳という営為は象徴している。注目すべきは、そのプロセスを通して訳者が新たな作者として立ち現れる場合だ。

まさにそうした、翻訳を通して原作者と入れ替わる形で新たな作者が誕生するという力動性を鮮烈に描き出している点に、日本近代文学の際立った特徴がある。二葉亭四迷や永井荷風や森鷗外といった名前はいずれも、作者と訳者の境界において出現する文学のあり方を示す指標である。彼らの仕事を、作者の観念を流動化させる契機をほらむものとして再評価しうるのではないか。

## 支部大会報告

一〇一三年度 春季大会

六月一日(土)

於・関西学院大学

〔パネリストから〕

発表を終えて

日比 嘉高

今回発表したテーマは、自分としても新しい取り組みだった。認知科学・認知言語学から物語論を考え直す、ということ、ここ数年個人的な勉強課題として抱えてきた問題である。発表では「主人公」の問題を中心にすえ、そこから「作家」「作者」に通じる道を考えてようと試みた。

認知科学から文学へでも、認知言語学から文学へでも同じだが、他領域の

成果を文学研究へ導入する際には「飛躍」が伴う。「飛躍」は、発想力が羽ばたく見せ場であると同時に、不確かな論証を覚悟の上で跳躍する危険地帯（もしくは落とし穴）でもある。

今回の発表で言うならば、脳神経科学におけるミラーニューロンについての議論を参照したことがその最たるものだった。概念化や言語の働きの前に、ヒトの脳細胞が他者認識を補助する基底的作用を果たしている、というこの領域の知見は、私たちの自他認識について大きな修正を迫るものである。

ただ、脳細胞から文学テクストへの道のりは、果てしなく遠いこともまた明白である。同様に、認知言語学から

物語論へと架橋する際に、——たとえば、一つの隠喩の分析や、カテゴリ化の考察から、作品言説全体の評価分析や、あるいは解釈や作家像の捉え直しへまでも向かう際に——、多くの階梯があることも明らかだ。認知科学・脳神経科学から文学研究へ、認知言語学から文学研究への距離は、とても遠い。

それでもなお、「飛躍」はなされるべきだろうと私は考える。認知から物語論を考える時に、ときどき私は書棚のロラン・バルト「物語の構造分析序説」を手にとった（『物語の構造分析』みすず書房、一九七九年一月、所収）。言語学から文学研究へと、『文』から『テキスト』へと跳躍したバルトの「飛躍」は、やはり蛮勇に等しい。しかし蛮勇とも言うべき試みだったからこそ、「転回」を引き起こした。

認知科学、認知言語学の知見を文学

研究へと橋渡ししようという取り組みは、国内外でさまざまにスタートしている。新しい領野を開拓していく試みは、試行錯誤の困難と喜びを運んでくる。自然科学と人文社会科学の現代的交点の一つである「認知」の問題は、怪しくも刺激に満ちた、知的な冒険の前線である。

## 〈作家／作者〉の領域

北川 扶生子

各パネリストのアプローチはまったく異なるものだったが、テキスト論以降棚上げされることで保持されてきた〈作家／作者〉を、テキストの構成要素のひとつとして、いまだ強力な解釈コードのひとつとして、その機能を明

らかにしてゆくという大きな方向性は浮かび上がったのではないか。

その上で、そもそも〈作家／作者〉が問題になる領域の輪郭を見定めておくことの重要性も再確認した。主体／内面／個性などの概念と、財産権としての著作権の概念は、近代日本においてほぼ時を同じくして浸透してゆく。しばしば集団による共同作業でもあったものが密室での秘儀へと移行してゆく、創作／鑑賞スタイルの変化がこれに伴う。

ジャンルや文体など、〈作家／作者〉以外の要素が強力な解釈コードだった文化から、〈作家／作者〉が特権的解釈コードとなる時代への移行プロセスの断面を切り取ることで、〈作家／作者〉の時代の歴史的始発点と浸透域、〈作家／作者〉を可能にし流通させる読者側の条件をあぶりだせれば、とい

うのが私の報告の意図でもあった。

文学テキストに限らず、文化的諸表象の空所として現前する作者／主体／根源と、軽やかに戯れるという事態は、現代ではありふれているようにも見える。ファッションとしての私／偶像をめぐめるしく取り替えてゆく文化消費の現場を日々眼にし続けていると、寸断される〈私〉に居心地の悪さを感じる者は果たして今や多数派なのかと問うてみたくもなる。しかし、中村三春氏が示唆されたように、〈作家／作者〉を求める心性と、根源／故郷／ナシヨナリズムを求める心性がどこかでつながっているならば、その根強さに足がすくわれる者たちの姿もまた私たちに親しいものだ。

この意味で、〈作家／作者〉をめぐめるこうしたアンヴィヴァレンツが先鋭化して現れていると思われる大衆文化



と教育とが、今後のテーマとして予定されていることにたいへん期待している。

会場の質問からも多くを学んだ。質問をお寄せ下さった方々、そして開催に御尽力下さった方々に、この場を借りて感謝したい。

## 国語教科書の中の「宮沢賢治」

——発表の補足——

木村 功

今回の発表では、伝記教材化された作家という観点から、宮沢賢治と金子みすゞを対象に、国語教科書に窺える作家像を分析・考察した。その際、伝記教材ではないと判断して言及しなかったものに、宮沢賢治を取り上げた高

橋世織「光と風からもらった贈り物」がある。光村図書出版の中学校国語科一年の教科書「国語Ⅰ」に採録され、採録期間は平成十八年度～平成二十三年度であった。宮沢賢治の詩「高原」と童話「鹿踊りのはじまり」を題材に、賢治の言語表現の世界の特徴を述べた中学生向けの評論文である。以下に紹介して、補足としたい。

「海だべがど おら おもたれば／やつばり光る山だたちやい」で知られる「高原」について高橋は、「動物や植物、あるいは岩石や海といった風景それ自体も、実は人間が誕生する以前のずっと昔から踊り、歌っていたというわけです。この詩は、人間がそうした自然に参加した瞬間の自覚を歌いあげた、スケールの大きな詩となつています。」（五五、五六頁）と評価する。「鹿踊りのはじまり」についても、「この童

話は、命あるものの原初の姿や在り方が語られた傑作童話です。自然の中では、人は鹿にもなれるし、人も、ほかの動物も植物も、光や風や、海や野原や山なども、みんなが地球上の同じ地平に共生しているものなのだという、地球環境に対するメッセージさえも読み取れます。」（五六頁。傍線木村）と述べる。「人間の自分勝手な人間中心の世界観ではなく、森羅万象、さまざまな生きとし生けるものたちに、人間は生かされているのだ、という賢治のつつしみ深い考え方に多くの人が共感する時代になってきました。時代がようやく賢治に追いついてきた、といつてよいかもしれません。」（同）と、賢治を「つつしみ深い考え方」を備えた人物として高く称揚している。高橋の評論もまた、発表で紹介した伝記教材同様、平成の時代に教科書が描き出した

賢治像、すなわち「自然と共生する宮沢賢治」像を示していたのである。

ただ、3・11の東日本大震災後、私たちが思い描くようになった「自然」像は、教科書の中で語られてきたような共生可能な自然とは異なってきたている。自然は、共生可能な相を示す一方で、共生など思いも寄らぬ暴戻な相も示すものである。「自然と共生する宮沢賢治」像についても、自然観を再構成した中で、改めて位置づけなおされることになるように思う。

### 発表を終えて

中村 三春

発表でも述べたことだが、与えられた「〈作家／作者〉とは何か」という

統一テーマは、当初は「今なぜ？」という感もなくはなかったものの、作業を進めていくうちに、これは現在でも意外に重要な問題なのだという実感に変わっていった。どうやら、作家や作者の問題というのが、今もなお多くの文学研究者の頭を離れないようなのである。理論的詳細は発表で触れたので省略するが、文芸テキストには当然ながら、作家や作者という要素以外にも豊富な内容が含まれている。せっかくだから、それらを残さず全部いただきましようというのは、不当な要求（あるいは貧乏人根性）なのだろうか。関係する論著を読み進むうちに、この疑問が湧いてくるのを禁じえなかった。従って、今回の発表の、その根底にあったのはそのように至って素朴な感覚なのである。

もう一つ念頭に置いたことがある。

〈作家／作者〉問題にせよ、他のいかなる理論的問題にせよ、これまで文芸理論について語る場合、いかにも持つて回った外来語や、難解な哲学あるいは社会学用語などをを用いることが多かった。私自身もそうであったし、だいたいにおいて理論というのは外来語の世界だと言っても過言ではない。それはやむを得ない側面もある一方、最近では、これからはそう易々とは行かないだろうと憶測している。〈作家／作者〉の分野でも、これまで主として問題とされてきたのはテキストから受ける「実感」の機微であったが、外来語を多用して述べられた論は、いかに巧みでも結局「実感」からかけ離れている場合が多い。もつとも、だからと言って理論が不要というのではない。全く逆に、今は理論を再構築すべき時期に差し掛かっていると痛感されるのだ

が、だからこそ、むしろ平易な日常用語によって、きちんとした文芸理論を立てることが求められるのではないか。私はこのたびの発表ではそのことにやや留意してみた。さて、結果はどうであったか。

そして、関西支部は多士済々で、質疑応答においても、懇親会でも、多様で深い意見を聞くことができ、発表者としてはまことに得るところが大きかった。たぶん全国でも最も活発な支部活動であることは動かないところだろう。シンポジウムの内容もさることながら、大会運営の手法などについても、多々見習うべきことが感じられた。大変に収穫の多い参加であった。執行部をはじめ、参加者のすべての皆さんにこの場を借りて御礼を申し上げたい。

## 「フロアから」

### 大会印象記（前半）

吉川 仁子

シンポジウム前半、まず、日比嘉高氏のご発表「登場人物の類型を通して作者は何を語るか―私小説を起点に―」では、メルロー・ポンティ、それを参照する認知科学の論理的枠組みについての説明に続き、主人公や主人公の類型というものが、身体化され、環境の中に組み込まれることで、虚構でありながら現実を作り変えていく力を持つものとして機能することが、『人間椅子』や『疑惑』などの本文を例に具体的に示された。また、作者を身体を持った認知主体とし、〈認知する身体〉の拡張と伝達の媒体として文学作品があ

り、その延長として、主人公と作者の関係は再帰的な〈鏡〉の関係にある「分身」と言えるのではないかという見解が示された。さらに、テキストから抽出された知覚の癖や環境の痕跡の検討を通して、また、パラテキストからも読者それぞれの認知作業に基づく作者像が作り出され、その像は、読者との間で再帰的な〈鏡〉の関係になるのではないかという見通しが示された。認知という観点からの主人公や作者の捉え方は何とか理解できたつもりなのだが、では、それを研究にどう適用したらよいのだろうか。例えば、質疑での、授業の場における学生と教員の描く作者像の相違の問題、教員が面白いと思うほどに学生が主人公に興味を持たないという問題は、まさに認知に関わる事柄であり、朗読の話が出ていたが、こうした問題にどう取り組むべきかこ

発表を手がかりに考えてみたいと思つた。

次の北川扶生子氏のご発表「『書く読者』が見た夏目漱石―ジャンル・文体的社会的機能とへ作者―」は、明治になつて社会的地位獲得のための手段として作文が必要とされ、その文章の手本として数多く出された文範により、江戸期以来のジャンルと文体の持つていた社会的違いの解釈コードとしての機能が教養のバリエーションへと変化していった過程が、豊富な例とともに示された。様々な文体を名文として並列する文範と、一作のうちに多様な文体が並置される夏目漱石『虞美人草』について、共に、本来ならば同居しない多様な文体を一つのテーブルに並置することで違いを脱文脈化、脱社会化し、言文一致体小説を準備したとする見解は大変興味深かった。確かに、文範における様々な文体の並置は、ジャンル／文体の本来持っていた差異を弱

めていくだろうが、それは、均質な文体的出現に具体的にはどうつながるか、また、『虞美人草』における文体的混在は文体的積極的な利用の面もあると思うが、それを文範の場合と同じように考えられるだろうか、等等、詳しく伺つてみたくなった。氏は、ジャンルと文体がその解釈コードとしての強度を弱め、文から文学が自立するところに、内面や個性を持つ作者が浮上するとし、文章家から小説家、そして作家へという漱石の作者像の変遷には、書き手自身の変容と、「書く読者」の変容が重なりと指摘した。改めて文学と社会との関係性について大きな示唆を得た。

二氏のご発表は、作者・作家という問題の論点の豊富さを再認識させてくれるものだった。それは、後半二氏のご発表についてももちろん同様であり、連続企画の今後にますます関心が高まつた。

## 大会印象記（後半）

吉本 弥生

二〇一三年度春季大会では、大変興味深い研究発表及び討論がなされた。ここでは後半の研究発表及び全体討論について、ご報告したい。

木村功氏は、「教室の中の〈作家〉―「伝記」教材における作家像―」と題して、宮沢賢治と金子みすゞを中心に、教育現場における童話・児童文学作品やそれに伴う作家像の取り上げられ方を焦点として、「伝記」教材のイメージが教育現場で造形されていくことの問題点をあげられた。氏によれば、その特徴として「学習者に生き方の一つの規範を提示する役割を果たす（規範的人物像）」方針があり、その中で教科書の中の作家像も形成されていくという。氏は、そういった教育の場で賢治像が「自己犠牲の精神を持った人」から「自

然と共生する人」へと変化するも、基本的には自己犠牲のイメージは踏襲されていることを指摘した。その例として、掲載作品が「グスコープドリの伝記」から「雨ニモマケズ」に変化した点をあげ、谷川徹三や西本鶏介、畑山博氏らの分析を用いながら、賢治像の形成とその変化を追った。木村氏は、葛西まり子氏の論考をてがかりに自然というチームに引き寄せられる賢治像が樂觀的であるという葛西氏の指摘に同感の意を示した上で、このような賢治像が人間像の典型・単純化を生み、本来ある作家の魅力が発揮されないことの問題を指摘した。金子みすゞの自殺や賢治の宗教者としての側面を削り落とし、「特有名ものを平均化し、普遍化していく」という公教育の在り方の問題を投げかける内容であった。

コーの「作者とは何か？」をあげ、機能―作者の対象化から論じられた。氏は、機能が主体の様々なタイプに過ぎないと述べた後、作者・作家神話に関する論議を加藤典洋の「テクスト論」批判から論じた。そこでは、実体ではなく、実定性としての作者が存在し、「普遍的な美の原理」があるものの、これに氏は懐疑的であり、それは、テクストを作者のアレゴリーとする寓意読みであり、不在としての作者像として位置付けられるという。中村氏の発表の中では「信憑」に焦点が当てられ、氏は、竹田青嗣の言語哲学批判に見られる「信憑」が加藤に受け継がれていることに触れ、主体へのこだわりとして、作者概念の表象化に言及しながら、「信憑」の具体的作品として、志賀直哉を例に小林秀雄、本多秋五の論を例えとして、志賀の「信憑」は唯一絶対的な主体性が充満し、「絶対的な作者の像」の「信憑」が作者・作家神話の形

成に見られることを指摘した。

興味深かったのは、中村氏が仮説とされた作家・作者神話がその根源においてユートピアを求める心性と関係があるのではないかというものである。特に、「家族主義やナシヨナリズムとの関係性の有無」という問題が提出された。この点について、今後のご研究に大きな期待が膨らむ。

続く全体討論では、各氏への質問が提出され、白熱した議論となった。作者の身体化、作品の読者層による読み相違（日比氏）、型の問題、作文教育と文学及び口承（北川氏）、研究と現場での作品・作家像の相違（木村氏）、作者の問題（中村氏）等、ここに全てを書き記すことが出来ないのが非常に残念である。それほど、今回のシンポジウムは興味深く、次回への継続性がある大きな成果を認められるものであったように感じられた。

管紀子著 『日本少年』 重見周吉の世界』  
重見周吉作・管紀子訳 『少年少女版 日本少年』

日比 嘉高

重見周吉は、夏目金之助と学習院への就職を争い、勝利した人物である。『『日本少年』重見周吉の世界』は、この重見周吉という人物をめぐる調査と考察を行う後半と、重見による英文の著作『日本少年 A Japanese Boy by Himself』(一八八九年)の全訳を収めた前半からなる。『少年少女版 日本少年』は、この『日本少年』の全訳を、さらに「少年少女」に向けて書き直して刊行したものである。

『『日本少年』重見周吉の世界』の調査・考察の部分においては、重見周吉の生い立ちや足跡を、さまざまな資料を駆使して明らかにしている。漱石との交点は学習院への就職をめぐる一点だけであり、その他は慈恵会医科大学および学習院における英語の教員とし

て、また開業医として生涯を送った、いわば市井の人物であるため、資料が少ない。この点で、著者の調査は今後重見周吉について調べようとする者にとっては、まず参照すべき成果となるだろう。

『少年少女版 日本少年』について言えば、四国今治の過ぎ去った生活を、今の子供達につたえる書物として編まれたものだが、今治に限らずとも、明治の生活史に関心を持つものであるならば、興味を持てる内容となっている。

さて、『日本少年』の全訳だが、質に關してはもう少し推敲が必要だと言わざるをえない。誤訳や訳し残し(？)が付されたままになっていたり、ガリア戦記の章題がそのまま訳されずに残っていたりする)が見られることは残

念だ。また、『日本少年』が刊行されたコンテキストについても、さらなる調査が必要ではないだろうか。訳者は新渡戸稲造の『武士道』や、チェンバレンの『日本事物誌』と比較しているが、むしろウォラス・アーウィンのハシムラ東郷もの(宇沢美子『ハシムラ東郷』参照)や、オノト・ワタナによる日本人少女小説などと比較した方がいかもしれない。つまり、日本および在米日本人たちが存在感を持ちつつあった時代の米国において、日本人がどのようによ表象されていたのか、という観点による比較である。今治の少年の物語は、そのとき別の相貌を表し始めるのではないか。

(『『日本少年』重見周吉の世界』)

二〇〇三年七月二〇日 創風社出版

一五五頁 一八〇〇円＋税)

(『少年少女版 日本少年』)

二〇一二年八月一五日 創風社出版

一七七頁 一二〇〇円＋税)

原 卓史 著

## 『坂口安吾 歴史を探偵する』

福岡 弘彬

本書は坂口安吾の歴史探偵——資料群に歴史の痕跡を見出し、解釈し、証拠とした上で、新たに物語を提示する方法——を追跡した、著者自身の探偵的研究の結実である。第一部では一九四〇年代の歴史小説、第二部では「安吾の新日本地理」等の安吾もの、第三部では安吾桐生移住後の上州剣豪もの、第四部では一九五二年から晩年にかけての戦国武将ものを、様々な資料・講談・実録等と比較することで、各作品の典拠を指摘し、さらに典拠と作品との同一性と差異を抽出することで、安吾が何を／如何に記そうとしたかが、ねばり強く考察されている。典拠の解明自体はもちろん、典拠探索の上で無視されがちな講談や実録等の「通俗的」

な文献まで調査対象としたこと、また、研究史上ほとんど看過されてきた上州剣豪ものを正面から分析し、後続の研究に先鞭をつけたことは、殊に意義深い。博搜の跡は随所に窺え、特に、調査の過程で見え「坂口安吾全集」別巻にも何点か収録された安吾の新資料群は、今後の安吾研究に大いに資するものとなるだろう。

惜しむらくは、長期にわたり安吾が歴史を記し続けたことの意味が、作家の歴史への「こだわり」という一貫性に収束した点である。この作家神話的観点に、歴史探偵方法の演繹的作品選元が与することで、本書が本来持つ広い射程を狭めたように思う。例えば『二流の人』『小西行長』『狂人遺書』が同

じ題材を扱いつつ表現を異にしたのは、歴史の解釈多様性・複数性を安吾が実践したためであるとされている。しかし「一貫性」を前提としたかかる相対主義的評価に回収する前に、各作品の変化に潜むメディア・時代背景との関連性や、歴史に対する作家の思考が如何に／何故変化したかを、追究し得たのではないか。

安吾及び彼を取り巻く環境は、戦中—戦後—死に至るまで、短いスパンで劇的に変質する。その間、様々なジャンルを横断しつつ幾度も歴史が題材となる、その度に生じた変化の微分を経たこそ、安吾にとっての歴史の総体が浮かび上がるのではないか。しかしそれは今後の研究対象として示された、「日本文化私観」等の他作品や、他作家の歴史小説との関係の中で明らかにしろ。さらなる展開を期待したい。

(二〇一三年五月二五日 双文社出版  
一九〇頁 四六〇〇円＋税)

斎藤 理生 著

## 『太宰治の小説の〈笑い〉』

岡村 知子

太宰治が〈笑い〉を誘う達人であることは誰もが認める事実であろう。その太宰の作品を〈笑い〉を切り口に論じ続けた研究書が存在しなかったことが、むしろ不思議である。本書がまさに太宰治研究史上の虚を突く衝動力をもって出現したことをまず喜びたい。しかし、具体的にどの作品のどの箇所にも、どのような笑いが喚起されるかということは、読者一人一人が背負う歴史的・文化的背景によって千差万別のはずである。著者は、読者が太宰の作品に抱く感想が「幅の広いもの」であるゆえに、本書における「〈笑い〉という言葉の定義」を「ゆるやかなものにとどめておきたい」と言うが、何を〈笑い〉と見なすのかを明確に定義しなれば、分析対象の選別自体が、著者の笑いの感性に基づく恣意的なものにならざるを得ないのではないか。

ともあれ、本書の目的は「〈笑い〉を誘うしくみを起点にした、個々の小説の読み直し」にあるため、ここでは紙幅の関係で、「第一部第二章 太宰治の『ドン・キホーテ』―『デカダン抗議』『恥』論」の内容を紹介したい。この章では、ミゲル・セルバンテス作『ドン・キホーテ』を補助線として用いることで、これまで関連付けて論じられることのなかった『デカダン抗議』と『恥』における共通点と相違点が明らかにされている。両作品は共に「中心になる人物が〈誤読〉によって独自の〈物語〉を立ち上げ」、「その〈物語〉に合わせて〈現実〉を解釈する、という展開を『ドン・キホーテ』から受け継いで」いるが、『恥』ではさらに、「物語に固執する和子だけでなく、〈現実〉を疑わない戸田を相対化する視座も用意されて」おり、「〈物語〉と〈現実〉

との境界のあいまいさを問題として浮上させている」と結論される。

このように太宰の作品の語り手は、「読者が予想し、期待する表現や内容からのずれ」を演出することで読者を笑わせるとともに、既成の概念や思考の枠組みを相対化する視点を読者に与えていることを本書は教えてくれる。ただ、ロシアフォルマリズムが明らかにした「異化」が、凡庸な日常生活の中から芸術表現を生み出す要件にほかならないように、「ずれ」の生成を指摘するだけでは、「おかしみ呼び起こすしかけ」の説明としては不十分であるように思われる。近代文学が「〈笑い〉を排除することで形作られてきた」という問題意識を持つ著者によって、落語や近世文学の具体的な受容の様相等も含み込んだ、太宰作品における〈笑い〉のしくみが解明されることを期待してやまない。

(二〇一三年五月三十一日 双文社出版)

二一八〇頁 四二〇〇円(税)



## 二〇一四年度関西支部春季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一四年度春季大会での研究発表を、自由発表および小特集企画それぞれで募集いたします。支部会員の皆さまの積極的な応募をお待ち申し上げます。

日時会場 二〇一四年六月七日（土） 奈良大学

募集人数 自由発表 二～三名 小特集企画 一～二名（他に支部依頼の発表を予定）

応募締切 二〇一四年二月二十八日（金） 必着

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の要旨を封書でお送りください。必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

### ◎小特集企画について

タイトル サブカルチャーと〈作家／作者〉（仮）

※二〇一三年度から始まった連続企画「文学研究における〈作家／作者〉とは何か」（全四回）の第三回にあたる特集です。

○小特集企画の趣旨等の詳細は関西支部HPに掲載いたします。

○発表時間は自由発表、小特集いずれも三〇分程度です。

○採否については、運営委員会で決定次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

送付先 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学日高佳紀研究室内 日本近代文学会関西支部事務局

## 事務局便り

### 〇二〇一三年度秋季大会について

二〇一三年度関西支部秋季大会は、全国大会と合同のかたちで開催いたします。全国大会の運営と企画の一部を関西支部が担う初めての試みであり、今後の、地方支部が全国大会開催に協力するかたちのテストケースの意味もあります。支部会員の皆様の多くのご参加とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 〇 献本のお願い

事務局では、本会報での書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

### 〇 維持会費納入のお願い

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしく願います。

### 〇 関西支部二〇一三年度役員

●支部長 大橋毅彦

●運営委員 天野知幸 越前谷宏 岡村知子 小川直美 金岡直子 木田隆文 須田千里 関肇 高木彬 高橋幸平

長沼光彦 長原しのぶ 永渕朋枝 西山康一 信時哲郎 日高佳紀（委員長） 山崎正純 山田哲久 山本欣司

渡部麻実 渡邊ルリ 和田崇

### 〇 日本近代文学会関西支部事務局

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学日高佳紀研究室内